



私は海岸に、一人でぼうっと立っていた。風が私のズボンをぴったりと脛にくっつけていた。

ヤドカリが声をかけてきた。

「あの、インタビューしてもいいですけど」

私は耳を疑った。別にインタビューをしたいわけでもないし、そんな申請した覚えはなかった。

「あの、ヤドカリくん、ご遠慮します。今はそんな気分じゃないので」

「名前は、かなみといいます。」

「かなみ？」

「はい」

「あの、インタビューするつもりはないんだけど、君は、あー、かなみさんは、いつもここで生活してるのですか？」

「はい。そうです。広く浅いところが大好きだから」

「そう」

「でも、ワタシの又従兄弟は、もっともっと海の深い場所に住んでいるんです」

「そう。ありがとう。これで、インタビューは終わりです」

「こないだ、雪国に、旅行に行ってきたんです」

「あれ、インタビューは終わったのにな」

強引にインタビューを終わらせようとした私だったが、思いのほか、ヤドカリが雪国に旅をした話に、興味をそそられていた。

「それで、どこへ？」

「名前はわかりませんが、とても、雪深いところです」

「ふむふむ」

「私は、雪の上を、スーツケースを引っ張って、歩いていたんです」

ヤドカリのスーツケースってどんなものだろう。と私は思った。

「それで、向かっていたんです」

「どこへ？」

「歌声が聞こえたんです。明かりも見えたんです。だからそこへ」

「特に目的があったわけでもないんですね。それなのに、よく雪国まで行く気になりましたね」

「目的はありました」

「え、そうなんですか？」

「はい。さっき言ったでしょう。ワタシの又従兄弟は深海に住んでいるって。だけどワタシは深海へは行けないのです。だから、又従兄弟にも会ったことがないのです」

「あら、そうだったのですか？」

「そう。だからワタシは又従兄弟に会うために、雪国へ行ったんです」

「あれ、ちょっと待って、話が見えなくなってきたけども、まず、かなみさんの又従兄弟さんは、深海に住んでいるんですよね？」

「はい。そうです」

「だったら、なんで雪国なんかに？」

「さっきも言ったでしょう。ワタシが行ったのは、とても、雪深いところだって。同じ、深いところに行けば、又従兄弟に会えると思って。だって、「深いところで繋がってる」っていうでしょう？」

ざざんと少し強めの波が来て、ヤドカリの体が一瞬持ち上がり、ゆらゆらと揺れた。私は少し胸が痛んだ。

「それで、結局、又従兄弟には会えたんですか？」

「それが、ワタシ、ホワイトアウトに遭ってしまって。ヒトの足跡に落ちてしまったんです。それで、そこから抜け出せなくなってしまって」

「ええ、それは大変だ。それで、どうしたんですか？」

「殻に閉じこもりました」

「それがいい」

「それでも寒くて、スーツケースの中味を全部だして、スーツケースの中に入りました」

「それもいい」

「目が覚めたら朝になっていて、スーツケースから出した持ち物が、全部凍ってしまいました」

「それはそうでしょう」

「スーツケースの中に、凍った持ち物を全部しまっ、もう帰ろうと思ったんです。歌も聞こえなくなっていましたし」

「うんうん」

「けれど、ワタシはまだ足跡の穴の中にいることに気づきました」

「あ、そうか」

「ワタシはまた殻の中に閉じこもりました。今度はスーツケースの中に入るのはやめました。もうクーラーボックスみたいになっていたので」

「それはそうだ」

「そしたら、声が聞こえたんです。今助けてあげるよって」

「え？だれの？」

「それがわからないんです。殻の中にいたので。ただ、体がふわっと宙に浮いて、殻から出てみると、ワタシの体とクーラーボックスは、穴の外に出ていました」

「ああ、良かった」

「だから、思ったんです。きっとワタシを助けてくれたのは、ワタシの又従兄弟だったんじゃないかと」

「顔は見たの？」

「いいえ。でも見ても、分からないと思います。会ったことがないので」

「そうか」

ざざんとまた波が来て、私はくしゃみを一つした。

「そろそろ、帰ります。インタビューはもうおしまいです」

「そうですか。それでは」

風がひゅうと吹いた。深い話を聞いた。と私は思った。

後日、私は海の奥深くから来たリュウグウノツカイから、こんな話を耳にした。

深海に住むヤドカリが、又従兄弟に会うために、海底火山に登ったと。

たとえ会えなくても、二匹は深いところで繋がっているようだ。

おわり

「あらかじめ、言っておきますが、」

と、司会が話し始めた。

「今日お集りのみなさん、ご存知だと思いますが、みなさま、用意された言葉ではございません。突然降って湧いてくる魂の叫びとでもいいでしょうか。ですので、皆様方が、その目の前にある、ロイター版ですね。それには感情という名のバネがついていますけれども、その板を踏み、そしてその板にあります泉に飛び込む瞬間、その言葉は生まれてくるのでございます。皆様の中に。いえ、先ほど降ってくると言いましたね。ですから、皆さまに課せられた、感情から生まれ出た、各国の言葉です。それを皆様が抱いて、そしてロイター版の勢いそのままに、この泉に飛び込んでいただきたいと思う次第でございます。よろしいですか？ご質問ある方？」

その時、泉の周りを取り囲んでいたロイター版の周りをさらに取り囲んでいた者たちの中の一人が、ジャンプして、ロイター版に飛び込んだ。

「仕方がないでしょ！」そう言いながらだった。その者は、叫びながら、勢いよく泉の中に飛び込んで行った。そしてそれに続くように、その向かい側にいた者が、同じようにロイター版で踏切り、こう叫んだ。「そんなつもりじゃないのに！！」今度は、最初のものよりも、さらに勢いが強かった。

水しぶきがはね、周りを取り囲んでいる者たちの数人にかかった。その中の一人が、軽くロイター版の上でステップを踏み、こういいながら泉の中に飛び込んで行った。「ひどい」

次から次へ、飛び込む者たち。しかしどのロイター版の後ろにも、次の者が控えていて、一人が飛び込むと次の者が前に進み出て、自分の順番を待っている。

ある者は、助走に失敗し、ロイター版に足を引っかけ、体が曲がったまま、泉に落ちて行った。「すき...です、おえ」

「かわいそうに」それをみた横の者が、ロイター版を踏まずに、泉の中に足を浸し、そのまま底に沈んで行った。

「ここから出て行った者たちは、もうここには戻って来られません。一度出た言葉は、永遠に消えることはないのです。そして、思わず思い切り飛び込んでしまった者は、後悔というブラックホールに吸い込まれます。または、ここに戻ってこようと、必死でジャンプします。けれどももうそれは元の木阿弥。二度と戻ることはできないのです。だからこそ、慎重に、この泉に飛び込まなければならないのです。けれど感情という名のバネは、調節が利きません。せいぜい、飛び込む時間を遅らせるぐらいしかできないのです。いつかはどこかで、このバネを使わなければ。縮んだままのバネは、いつか爆発するのです。」

そう説明する司会の横で、たくさんの者たちが、泉に飛び込んで行った。

「あの、私、ここにずっといてもいいですか？」

司会の裾を引っ張って、小さな声で話すものがあります。

「あれ、あなたは、なぜここに？もうとっくに泉に飛び込んでいるはずでは？」

「言いたいのに言えないのです。みてください」

司会は、裾を引っ張られたまま、あるロイター版の前にたどり着いた。ロイター版のバネは、まっすぐな一本の針金になっていた。

「なんてことだ！こんなのはみたことがない」

「もう、私はジャンプできません」

「では、ジャンプしなくてもいいから、泉に入って行けばいいでしょう。そうしているものたちも、いるはずですよ」

「それが、私には、降りてこないのです。なにも」

「そんなことはないでしょう」

「いいえ。聞こえるのです。私にだって、私が抱いて飛ぶ言葉が。それでも、私はそれを抱いて飛ぶことはできないのです」

「どうしてです？」

「それは、折れ曲がってしまったからです」

「言葉が？」

「はい」

「みずから、折れ曲がってしまったのです」

「それを持って泉に飛び込んだら…」司会の顔は青ざめました。

「そうです。ですから、この言葉は決して言ってはいけないのです。言ってしまえば、全てがくるってしまいます。すべてがひっくり返ってしまうのです。ですから、言わないように、言えないように、バネが、自分からまっすぐに伸びてしまいました」

「そういうことだったのですね。わかりました。けれど、さぞかしつらいことでしょう。かわいそうに」

「だから、ここにいてもいいですか？」

「いいでしょう。許可します。端に座って、見学しててください」

「はい」

そのものは、泉を取り囲む集団を見つめながら、泉から離れていった。そして遠くから、泉に飛び込む者たちを見つめていた。

「私だって、飛び込みたかった」

その言葉は、宙に舞い、ほこりと混じって、泉に流れて行きました。

泉の水温を測っていた司会の助手は、「あら、少し水温が高いようです」と、司会に報告した。

「大目に見てください」

司会は、泉に飛び込む者たちを細い目で見ながら、そう言った。

【2017-02-16】指さし小説 第11話

<http://p.booklog.jp/book/113146>

第11話 今回のテーマは、「深い」でした。今回は、指さしに和英辞典を使ったので、割と有名な言葉が出ました。ほっとしたのもつかの間、意外と難しかったです。こんな感じになりました。

第12話 配信が遅くなってしまい、すみません！！今回のテーマは、「語調」でした。同じ言葉でも、語調によって、聞く人に違う意味に捉えられる。だからこそ、語調が生まれる瞬間を見たくて作ってみました。けれど物語は意外な方向へ。そしてなんだか、テーマはこっちなんじゃと思うくらい、「ロイター版」ということばを使っていますね。跳び箱の前に置いてあるあれです。なんだか気に入ってしまったので、頻出してしまい、すみませんです。

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113146>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト